

日本スポーツ整形外科学会 2025 (JSOA2025) 開催に向けて

(医療法人社団 TSOC 理事長, TSOC 北参道 院長) 菅谷 啓之



この度、日本スポーツ整形外科学会 2025 (JSOA2025) を、2025 年 9 月 12 日 (金)、13 日 (土) の 2 日間、東京都港区のザ・プリンスパークタワー東京にて開催させて頂きますことを誠に光栄に存じ、ここに改めて報告させて頂きます。

皆様ご存じの通り、本学会は日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 (JOSKAS) と日本整形外科スポーツ医学会 (JOSSM) がコンバインドして設立され、2023 年 6 月には安達伸生会長のもと広島で最初の学術集会として、2024 年 9 月には熊井司先生・金岡恒治先生を会長として早稲田大学施設を中心に開催されました。本年の学会は新生 JSOA 第 3 回目の学術集会となりますが、企画に当たっては、盛会であった過去 2 回の学術集会の成功を受けて、更に色濃く JSOA の特徴と方向性を出していくように努めてまいります。そこで、今回の学会テーマを“知と技”すなわち、Expertise in Orthopaedic Sports Medicine とし、サブタイトルを Athlete Management と Sports & Arthroplasty としました。これは JSOA 学会員のメインテーマともいえる我が国のトップアスリートを含むスポーツ選手を如何に支えていくかということ、また、昨今のスポーツ熱の高まりのなか、

変形性関節症や腱板広範囲断裂を来した中高年が人工関節置換術を経てどこまでスポーツが可能になるのかをテーマとして、それぞれについて海外からのエキスパートを交えてディスカッションしたいと考えております。

学会場は、広大な企業展示スペースと 600 名収容の大会場 4 室と 180 名収容の小会場 10 室を 1 つのフロアに配し、非常にアクセスの良いレイアウトとなっております。更に、海外からの招待講師を約 30 名招聘しており、トラベリングフェローも含めると約 40 名の外国人ゲストが、また一般参加者についても広く海外から公募しており、まさに国際学会の様相を呈することが予想されます。そこで、英語セッションが多くを占める第 1 会場と第 2 会場には日英同時通訳をつけますので、是非とも積極的に英語セッションの聴講とディスカッションへの参加をお願いしたいと思います。

最後に、本学会を、医師・メディカルスタッフの職種の垣根のみならず、国の垣根も超えた活発なディスカッションを通じて、参加者および会員の皆様にとって有意義な実り多い学会としたいと考えております。多くの会員の皆様のご参加を心よりお待ちしております。

会 告

- 会 期** 2025 年 9 月 12 日 (金)～9 月 13 日 (土)
会 長 菅谷啓之 (医療法人社団 TSOC 理事長、TSOC 北参道 院長)
テーマ “知と技” Expertise in Orthopaedic Sports Medicine
 1. Athlete Management 2. Sports & Arthroplasty
会 場 ザ・プリンスパークタワー東京 〒105-8563 東京都港区芝公園 4-8-1
学会Webサイト <https://www.huddle-inc.jp/jsoa2025/>



サッカーオリンピック代表におけるメディカルサポート 五輪とプロ選手

東京大学/日本サッカー協会医学委員/
パリオリンピック男子サッカー日本代表ドクター 武富修治



2024年に行われたパリオリンピック男子サッカーに帯同させていただきました。サッカー男子日本代表チームは23歳以下（2001年生まれ以降）の選手を中心に構成される。私は、2018年からパリ五輪世代のU-17日本代表チームの世話人ドクターとして関わっており、そのまま7年間、当世代を継続して担当してきた。従って、この世代と関わり始めた際は全員がアマチュア選手であったわけである。長期間に渡り代表チームに携わった経験から、年齢・カテゴリーの変遷に伴いアマチュア選手がプロ選手になっていく年代のメディカルサポートの変化について考えてみたい。

最終的に2024年のオリンピック最終予選にあたるU-23アジアカップでは登録23選手中、プロ選手（うち海外クラブチーム所属5名、Jリーグ所属17名）が22名、アマチュア選手は1名のみ（大学生）であり、パリ五輪本大会では登録メンバー18名+入れ替え可能なバックアップ選手4名の計22選手中、全員がプロ選手（うち海外クラブチーム所属8名、Jリーグ所属14名）であった。

サッカー代表におけるケアの流れとしては、症状がある選手は決められた時間にメディカルルームを訪れ、ドクターの診察後、必要な場合はトレーナーによるケアを受ける。我々は、育成年代の選手のケアにおいては、外傷や障害の原因となっている身体的問題を探り、それを改善するトレーニングやセルフケア法を伝えることで、自分の身体を理解することやできるだけ怪我をしにくい身体作りなどに自分から取り組んでもらうことを重要視している。一方で、プロ選手になると、前述の取り組みを前提として、張りに対するマッサージなども日ごろから自チームで受けているため、求められるようになってくる。その境目が、プロになって数年の20歳前後であるように感じる。

オリンピックのサッカー競技は、オリンピック開催都市では

ない地方のスタジアムで行われ、遠距離の移動を伴うことが多く、かつ短い大会日程の中、予選リーグと決勝トーナメントをこなすため、中2日の日程で試合が組まれ、選手の身体には非常に負担がかかる。従って、ケアを求めてメディカルルームを訪れる選手は多く、多いときは、登録選手全員がケアを希望することもある。オリンピックでは海外選手を含む全員がプロ選手であり、ドクターの診察後、トレーナーのケアを1選手あたり40分に設定した。22名全員だと計14時間40分のケア時間が必要となる。通常アンダーカテゴリーの海外遠征の帯同はドクター1名、トレーナー1名の体制で臨むことが多いが、世界大会ではトレーナー2名体制で臨んでいる。しかし、プロ選手のみで構成されているオリンピックでは、それでは全くマンパワーが足りない。幸いパリ五輪チームの監督や協会がメディカルチームの重要性を理解してくれていたため、五輪最終予選および本大会はトレーナー4名体制で臨むことができた。メディカルチームのマンパワーが充実しているとある程度の外傷が発生した際にも、しっかりしたリハビリテーションを行うことができ、早期復帰の可能性を高めることができると考えている。さらに、マンパワーがあると軽微な症状のうちに、しっかりした濃厚なケアを行うことができ、難治性の障害や重症外傷発生の予防が可能になると思われる。

パリオリンピックでは残念ながら目標としていた優勝、メダル獲得には届かなかったが、十分なメディカルサポートによって、選手・チームは最大限の力を発揮し、世界の強豪と互角以上の戦いができたと考えている。充実したメディカル体制をサポート頂いた関係者に感謝するとともに、近い将来に日本が世界大会で優勝することを祈念、確信している。



パリオリンピック男子サッカー日本代表のメディカルスタッフ



パリオリンピック男子サッカーピッチ上

なぜ7人制日本女子ラグビーは強くなったのか？

医療法人利光会 五反田病院 理事長 五反田 清和



2025年2月21日、バンクーバーで行われたワールドシリーズ大会で、7人制ラグビー女子代表（以下、サクラセブンズ）は強豪国オーストラリアと互角に戦い、アメリカ・フィジー・イングランドを破り世界4位、年間ワールドランキング5位とメダルに後一步の所までできました。

一昔前迄は、アジアで優勝するのも難しいチームがなぜ強くなったのか？

7人制女子ラグビーの歴史は1999年の香港大会での日本代表の出場を皮切りに、2016年リオデジャネイロオリンピックでの7人制ラグビーの正式採用を受け、2010年より本格的に強化が開始されましたが、1番の課題は日本における女子ラグビーの競技人口の問題でした。ラグビー先進国であるニュージーランド・イングランド・オーストラリアの女子選手は約1万人に対し日本は2400人程度です。

この圧倒的な人数の差の中でも躍進した大きな要因としては

①各年代のタレント発掘・育成を目的としたセブンズアカデミーが開催され、ラグビーでオリンピックを目指したい他競技からの競技転向をする選手やユース世代の選手が増えた事。

②2014年に太陽生命保険が特別協賛を行い、女子国内リーグがスタートし、国内全体の低年齢層からの7人制に特化した選手の裾上げができてきた事が挙げられます。

その中で医学的サポートが開始されたのは、2010年より聖路加国際病院 田崎篤先生が代表チームドクターとして最初に帯同され、その後私は2015年より帯同させて頂きました。

諸外国に比べ、体重や身長差で劣る日本選手は速さ、低さ、運動量の機動力とラグビー頭脳で優るしかなく、年間約230日に及ぶ世界の練習量とトレーニングを積み重ねながらラグビーの理解度を深めていきました。その中で疲労という目に見えないものを如何にコントロールするかが特に難しく、当初はコンタクトに伴う傷害が圧倒的に多い状況でした。中でも非接触性ACL損傷や肉離れなどの下肢傷害発生率の頻度は顕著でした。そこで真っ先に取り入れたのが、2012年より選手のコンディションを管理・分析するアプリを導入し、毎日の選手・チーム全体の状態を確認していきました。

客観的データ（体重・体温・睡眠時間・生理周期）と主観的データ（疲労度・食欲）を毎日確認し1日のスケジュールをコントロールし、それを元にリカバリープランを毎日個別に作成していきました。また意識改革として選手の自主性を促し、セルフコントロールの時間を多く作りました。その一つとして、2013年にサクラセブンズメディカルチームが作成導入したACL損傷予防プログラム Sakura Knee Injury Prevention は今でも全てのカテゴリーの女子選手のウォーミングアップに組み込まれ、ACL損傷予防に繋がっ

ています。

（ACL 傷害発生数：①リオ五輪まで2013～2016年9名、②東京五輪まで2017～2021年は10名、③パリ五輪まで2022年～2024年は4名、パリオリンピック以降0名）

また、月経痛やPMS（月経前症候群）に対して個人の状態にあったピルの使用を、JISSの婦人科外来や全国の婦人科ドクターに相談し今ではチームの半数以上が内服コントロールされています。併せてパフォーマンスを大きく左右する鉄欠乏性貧血の選手をピックアップし、鉄分補給だけでなくチーム専属の栄養士さんより栄養指導を積極的に行って貰いました。

こうした取り組みによって身体は小さいけれど、芯は強いスコッド選手を近年多く抱える事が出来るようになりました。

結果として、日々の練習の強度も上がった事から試合で強豪国と対戦しても当たり負けしないようになり、更に互角に戦える自信という大きな武器を持った事から、強くなってきたと思います。

最後に、7人制ラグビーは1年の殆どをチーム一緒に過ごすことから、セブンズファミリーという言葉をよく使います。

これまで積み重ねてきたファミリーの歴史の上に、今のNEW世代が更に磨きをかけ、ロサンゼルスオリンピックでは綺麗な桜を満開にしてくれるとわくわくしております。皆様、引き続きサクラセブンズの応援宜しくお願いします！



2018年サンフランシスコで行われたラグビーワールドカップ・セブンズ2018



灼熱のジャカルタアジア大会で田崎先生、高澤先生と一緒に撮影



2024年パリオリンピックにてマクロン大統領と一緒に撮影

Traveling Fellow 報告記

SIAGASCOT

京都大学医学部附属病院 下園 由泰



このたび、イタリア4都市を巡る2週間の貴重な研修機会をいただきました。橘先生が各施設での手術の詳細を書かれていますので、私はそれ以外の印象深かったことをご紹介します。

まず各施設に共通して感じたのは、術者の正確さと迅速さです。総じて手術スキルが高く感じました。また、印象的だったのはローマのCampus Bio-MedicoでのGuiseppe Longo先生の精力的な臨床・研究活動でした。ASローマと提携し、選手が負傷した際に即時対応できる体制を整えており、また同病院は動作解析室が病棟内にあることで、入院前にスムーズに解析を受けられる動線設計にも感心しました。

イタリアの先生方は、毎日夜遅くまで我々を歓迎するディナーを開いてくださる一方で、翌朝7時半には手術を開始するというパワフルさを持ち合わせており、その熱意と集中力には感銘を受けました。手術の入れ替え効率には施設差があり、2部屋を効率的に使う施設もあれば、日本のように手術間隔が長い施設もありました。手術は膝や肩が中心で、足の手術は施設によってはタイミングが合わず見られませんでした。膝・肩専門の医師にとって理想的なフェローシップだと思いますが、足を専門とする私にとっても多様な術式を学べ、足への応用も可能で非常に有意義でした。また、各施設で講演の機会もいただきましたが、レジデントの高い学習意欲と体系的な知識に感心しました。SIAGASCOT

ではサッカーさながらの熱量あるディスカッションに触れ、イタリア人気質の現れた印象深い学会でした。

研修医プログラムは米国と同様、手技習得効率が高い専門分野ごとに回るスタイルで、研究活動も積極に行える環境が整っています。日本の研修制度も見直すべき時期に来ていると感じました。

滞在中は様々な方と診療や教育、研究について議論を交わすこともできました。貴重な経験が得られ、このフェローシップに参加することができて本当に良かったと思っています。このような機会を与えてくださったJSOAの先生方、共に旅をしてくださった井樋栄二先生、橘優太先生、快く送り出してくれた妻・家族、そして京大の先生方に心より感謝申し上げます。



SIAGASCOT 学会にて

大阪労災病院 橘 優太



この度、JSOA-SIAGASCOT traveling fellow に選出していただき、刺激に満ちた2週間のイタリア滞在をさせていただきました。ここに報告いたします。今回は3都市を訪問し、たくさんの手術見学をさせていただきました。どの施設でも素晴らしいホスピタリティに感銘を受けました。

ミラノ(3月17日~19日)ではASST Gaetano Pini CTOを訪れ、Pietro Randelli先生の様々な肩関節手術とカスタムメイドTKAのほか、Paolo Ferrua先生(写真)のMPFL再建では手洗いして入らせてもらいました。

トリノ(3月20日~22日)ではMauriziano Umberto Hospitalを訪れ、Roberto Rossi先生のLateral extra-articular tenodesis 併用のACL再建やDavide Bonasia先生のDLOのほか、日本では容易に見ることのできない同種半月移植を見学しました。

ローマ(3月23日~26日)では2カ所の病院を訪問し、Campus-BiomedicoではUmile Giuseppe Longo先生の肩関節脱臼に対する関節鏡下腸骨移植、Concordia HospitalではGiovanni Di Giacomo先生のリパース人工肩関節置換術などを見学しました。

SIAGASCOT開催地のナポリ(3月27日~29日)ではJSOAセッションで発表する他、英語発表されているシンポジウムで質

問もしました。また学会主催のディナーにも招待され、各訪問先でお世話になった先生方に再会でき、素晴らしい時間を過ごしました。

海外の数多くの先生方とつながりを持てるtraveling fellowshipは、世界への窓が開けるまたとない絶好の機会です。このような素晴らしいチャンスを与えてくださったJSOA理事と国際委員の先生方、一緒に回ってくださった井樋先生と下園先生、快く送り出してくれた家族ならびに衣笠和孝先生と西川智也先生をはじめとした阪大スポーツの先生方にこの場を借りて感謝申し上げます。

PS. 増刊号版ではその他の活動報告をいたしますので、そちらもご覧いただければ幸いです。



Paolo Ferrua先生(左から2人目)と小生(真ん中) ラグビー談義で個人的に盛り上がりました

財務委員会

担当理事：寺本 篤史（札幌医科大学）

委員長：津田 英一（弘前大学）



財務委員会は寺本篤史先生が担当理事をお務めになり、荒木大輔先生、谷口昇先生、松浦哲也先生と津田英一の4名の委員で構成されています。財務委員会の業務は本学会の財政に関わる業務一般であり、主なものは予算の立案、決算の報告、財産の管理、長期的な財政計画の検討などです。学会の理念と会員の利益の観点から、会員の皆様からお預かりした会費を適正に運用するために、厳正な委員会審議を行っております。

予算の立案は、年間の事業計画に沿って予想される収入を各事業に分配する作業となります。主な収入は年会費と学術集会の事業収入です。学術集会収入の多くはその開催経費に充てられるため、収支によって黒字が生じたときのみ他の事業に回すことが可能となります。そのため安定した財源としては、皆様から納入いただく年会費が学会活動を行ううえで最も重要なものとなります。このような仕組みをご理解いただき、期限内の会費納入に是非ともご協力ください。学術集会開催経費以外の主な支出としては、学会雑誌発行、研修会開催、研究助成・学術賞、国際学術交流事業、広報事業、事務委託などの経費があります。本委員会としての案を作成し、理事会に審議事項として提出しています。

決算の報告のためには、各科目の収支を集計し全体の決算を確

定し、予算案との差異を科目ごとに検討する作業を行っています。予算案との差異が大きい支出に関してはその原因を明らかにし、次年度の予算案作成の参考にするとともに、改善に向けた検討事項も含めて理事会に提出しています。

本学会で管理している資産は全て流動資産です。流動資産は主に銀行預金と未収入金からなります。主に未払金と他会計の借入金からなる流動負債とともに集計し、財産目録として報告しています。

本学会は日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（JOSKAS）と日本整形外科スポーツ医学会（JOSSM）が合併した際に多くの事業を引き継ぎました。いずれもスポーツ整形外科領域における学術研究推進、若手医師育成、国際的プレゼンス向上のために必要な事業ですが、最近の物価高騰等による支出の増大のため財政状況は決して安泰とは言えません。本学会が事業を継続しさらなる発展を遂げるためには、健全な財政基盤の下で活動を行っていくことが不可欠です。財務委員会ではこれらのバランスをとりつつ、長期的な視野に立って財政計画を検討してまいります。皆様のご協力をお願いいたします。

JOANR 進捗状況

レジストリ委員会 担当理事 田島 卓也（宮崎大学）

委員長 鈴木 朱美（山形大学）



日本で開発された関節鏡は世界中に普及し用いられるようになった。関節鏡手術およびスポーツ整形外科関連手術における本邦の技術力の高さを示すためには、実態把握と解析が必要である。JOSKAS では関節鏡手術症例に対し、2012年1月より中田研先生を中心に構築された症例登録システムとして紙媒体での症例登録を開始し、2015年7月からwebでの登録（eNOTE）を行っていた。2020年4月よりJOANR 2階部分にも関節鏡手術レジストリを配置し、併用運用していた。2023年6月にJOSKASと日本整形外科スポーツ医学会がスポーツ整形外科関連分野を統合する形で再編され、今後は日本スポーツ整形外科学会（JSOA）で関節鏡およびスポーツ関連手術のレジストリを運用することとなった。2025年4月1日からの新たなレジストリの運用開始を目指し、2023年8月にJSOA 将来構想委員会より独立する形でJSOA レジストリ委員会が発足した。脊椎・肩・肘・股・膝・足分野の担当者各2名およびアドバイザーとして前達雄先生、中前敦雄先生を加えた委員会を構成し、対面とオンラインでの会議、さらにメールのやり取りで協議を重ねてきた。従来の内容の改定および新たに追加する項目について慎重に協議を重ねて準備を行う中で、スポーツ関連手術や鏡視下手術が重複し、かつすでに個別のレジストリを運用している日本股関節学

会・日本脊椎脊髄病学会などの学会等とも連

携を図り、入力する医師に負担の少ない方法を模索した。また、JOANR 2階部分に個別のレジストリを設置している各学会（JSSR、JSS、JSIS、OPLL、JAR など）およびJOANR 本体で構成される日整会症例レジストリ委員会での毎月の会議をおこない、研究計画書の改定等も実施した。各担当者で策定した改訂案はJSOA レジストリ委員会およびJSOA 理事会の審議を経た後に学会HPにて学会員からのパブリックコメント募集も実施している。これらの経緯を経て作成したレジストリ案をスペシャリスト・ドクターズ社および日立ハイテック社に依頼し、運用開始に向けてシステムの改修・構築作業を進めている。新たなJSOA レジストリのテスト画面の確認および調整を行っているが、2025年3月現在においても微調整や新たな項目の追加作業が発生しており、委員・アドバイザー全員で改修作業に当たっている。

全国的にデータを収集可能なレジストリの構築は学術的にも社会的に意義がある。学会員の皆様に有効に利用していただけるレジストリになることを祈念し、収集したデータを基にJSOAの存在意義を示していきたい。

編/集/後/記



いわゆるロングセラーと言われる商品は、その何十年にもわかる歴史の中で、商品のパッケージから味や品質まで少しずつ改良している。安心して消費者が継続購入してくれる程度に、時代と共に変化することを「丁度可知差異」という6文字熟語で表現するらしい。

1974年にオリンピック憲章からアマチュアスポーツの文言が消えてから、五輪スポーツにプロ選手が少しずつ参加できるようになり、そして現在がある。プロサッカー選手のメディカル管理には日々進化する専門性を備えながら細心の準備と注意で挑まれている。女子ラグビーは2016年に初めて五輪種目となり、最下位であった日本代表は身体差の現実に当たりながら、近年は世界大会最高位4位と躍進している。その過渡期に携わる部

門として、医科学サポートは強化のみならず管理制度の作成として様々な試行錯誤、創意工夫がおりあったであろう。そして日本整形外科症例レジストリー(JOANR)の関節鏡手術においても、その変革期を乗り越えようとしている。

未だ遠からぬ異国間で戦火が消えず、突然の大関税の宣言に経済が大混乱し、米価の高騰に幸せな食卓への不安を感じえぬ日々である。しかし、医療だけは安心、安定のものでありたい。そして、議論を重ねて、時代の流れに合わせて進化していくために、学会活動はあるのだと初志を改めて想起する日々である。



田崎 篤
日本医科大学

JSOA ニュースレター No.4 2025年5月25日発行

編集：日本スポーツ整形外科学会広報委員会

山本宣幸（担当理事）、前達雄（委員長）

赤木龍一郎、新井祐志、落合聡司、田崎篤、田中誠人、中川幸洋、橋本祐介、松下雄彦、丸山真博

発行：一般社団法人日本スポーツ整形外科学会

〒103-0027 東京都中央区日本橋3-10-5 オンワードパークビルディング 株式会社コングレ内

TEL 03-3510-3744 / FAX 03-3510-3748 E-mail info@jsoa.or.jp URL <https://jsoa.or.jp/>